貴州と雲南の明清史跡——永暦帝・呉三桂・満文対聯——

細谷 良夫

1．発端

東北地域を歩いていて考えたことに，広大な地域のわりに居住する民族の種類が少ないことがある。これに対して広西壮族自治区・貴州・雲南などの南部地域は多数の民族が数えられている。雲南省の場合では，25の少数民族を数えその人口は全体の1/3を占める。それだけに雲南や貴州のガイドブックのほとんどは，この地域に住む少数民族の解説にかなりの頁を費やしている。このことに示されるように，南部地域の特徴は，さまざまな民族とその民族によって育まれた独自の文化が存在することである。南と北という相違はあるにせよ，同じ中国の辺疆地帯でどうしてこのような相違があるのか，東北出自の満洲族政権である清朝の南部地域に対する民族政策の影響がなぜ今にまで及んでいるのかなどの疑問を，現地を歩きながら考えてみたかったことが，この旅行の一つの契機である。

もう一つはより具体的な問題，すなわち貴州・雲南に満文石碑や呉三桂の史跡などが残されているのかどうかということである。これまでも〈清朝政権に参加した漢人の様相〉という研究課題を設定してきただけに，清朝の入関に多大な役割を果たしながら，三藩の乱で反乱者とされた尚之信や耿精忠それに呉三桂をめぐって，彼らが勢力を振るった広東・福建・貴州・福建などにどんな史跡が残されているかには，大きな興味がある。そしてまた東北・満洲の東北夷の政権と文化を代表する満洲語が南蛮にどう受け入れられたのか，その痕跡を探し出したいとも思った。

ところで，これまで目にした東北地域における呉三桂の史跡は少なくはない。清軍の入関をめぐって睿親王ドルゴンと呉三桂が会見したといわれる〈威遠堡〉の土塁の上に立ち，南方指呼の間に山海関の城門を望みながら，明清交代の転換点がひっそりと忘れられていることに感慨を覚えた《1988年8月》（以下，《》内に史跡を見た年月を記す）ことを始め，つい最近では遼寧省博物館の旧本館入口階段下に置かれている『定遠大將軍』と号された「崇禎拾五年拾貳月吉旦」鋳造銘がある紅衣砲は呉三桂が鋳造させたであることを知った《1999年8月》。吉林社会科学院の李治亭教授は呉三桂の「昭武」，呉世璠の「洪化」年号のある呉氏の銭を見せてくださるとともに，「三藩の乱の終結以後，黒龍江には呉三桂の配下が流され，その子孫が沢山残っている」と教えてくださった《1988年8月》。呉三桂の鋳造した銭については，伊通満族郷の成立と共に発刊された『伊通満族——ITUI MANJU BEYA——』創刊号（1989年8月）に掲載されていた《1989年8月》。しかし伊通の満族博物館に赴いた時に，天聡銭の展示はあったが呉三桂銭は見あたらなかった《1996年9月》。呉三桂配下の壮丁が東北に流されたことについて，当時『北方文物』の主編であ

った呉文衡氏や編務室主任の曲守成氏から「呉三桂軍団の壮丁は斉斉哈爾から愛琿に至る駅の駅丁（站丁）に充当され，その子孫は今も家譜を持っているなど，呉三桂配下の壮丁の子孫であることがはっきり判る」との話を聞いたが《1989年8月》，斉斉哈爾から愛琿に至る駅站の走っていた富裕県では，富裕県老幹部局の鄭化寧氏から「呉三桂配下の壮丁が富裕及びその周辺の站丁となったので，富裕地方には現在でも雲南，貴州の服装や習慣が残っているし言語も相違する。このような集落は４カ所確認できる」との話を聞いた《1990年8月》。また，琿春市郊外の三家子満族郷古城村で医療衛生所所長の関吉勝氏は「私の家は琿春で200年くらい続いたが，その昔の故郷は遼南であり，故郷では遼南を『小雲南』と呼んでいる」と話してくれた《1995年9月》。

呉三桂の銭や壮丁を通じて東北各地に伝わった雲南の文化を知ると，貴州や雲南に呉三桂の史跡が残されているのかどうかを知りたくなる。多くの少数民族が生まれるに至った地勢を眺め，呉三桂が権勢を振るった地域の現状と史跡，ほとんど期待は出来ないであろうが碑文などに残された満洲語文化に巡り会うことを考えながら旅立った。なお，この調査は2000年1月8日北京発貴陽着，以後車で貴陽から安龍を経て昆明に至り，更に昆明から大理を経て澄西（芒市）へ，そして澄西から昆明を経て北京に1月22日に戻るまでの15日間であり，毎年の調査で助力を得ている哈爾濱市社会科学院王禹浪研究員との二人旅で行った。

以下にこの調査で得られた呉三桂に関連する史跡，出向く前は期待もしていなかった南明政権永曆帝の史跡，そしてわずかに残されていた満文対聯を中心に，貴州と雲南の明清史跡の現状を報じておく。

２．貴州

貴州と雲南の社会科学院には哈爾濱市社会科学院賈院長から，我々が呉三桂の史跡や満文史料を求めて訪れることを連絡してもらっていた。貴陽に到着後，王禹浪氏は貴州社会科学院に連絡してくれるが，この地には明清研究者が多くなく，余り芳しい情報は得られない。西安に行って八旗駐防の後を尋ねて冷笑されたように，ここでは少数民族の歴史が中心で呉三桂などは興味の対象外らしい。呉三桂に代わって得られた情報は永曆帝をめぐる史跡が安龍に残されていることである。

〈貴州省博物館〉

歴史部門と民族部門の2部門に大別されているが，歴史部門では貴州が東漢時代から発展していたことをうかがわせる出土品の展示が多い。展示されていた文書の1つ『誉黄』は，清末に楊龍喜が反乱した時の詔書であるが，詔書の中に「大明江漢八年」と明の復興を主張する年号を記し，詔書の文章には激しい反満洲族感情が記されていた。

〈貴州城東門〉

社会科学院や博物館の情報，ガイドブックにも貴州城の城壁や城門が残されていることなどは全く記されていない。チャーターしたタクシーの運転手が貴州城東門が残っていることといい，案内してくれた。塁門の名残を示す狭い曲がりくねった道に入り込むと，かなり巨大な城壁と城門が残っている。修復された城壁と城門の上には文昌閣が建てられている。文昌閣の周辺の壁には「康熙三十一年文昌閣重修碑文」など数本の漢文碑文がはめ込まれ残されている。

その後で西門のあった場所にも行ってみたが，繁華街のまっただ中であり城門の痕跡もない。ただ門のあった外側にはかつての護城河であった河が今も流れていた。

〈甲秀楼〉

明代建築の三層楼閣として観光名所となっているが,歴史的な興味を惹かれるものはなかった。一巡した後にお土産売りのおばさんに勧められて2階の古衣装売り場に登ってみると，吹き抜けの天井の横梁に「永暦乙未年孟秋月吉旦火器営都督？？建」（？？の2字は薄暗くて読めなかった）と大書されていて，甲秀楼が南明永暦政権の下で乙未年すなわち順治12(1655)年に建立されたことを示していた。

〈清岩鎮の明清古建築〉

貴陽市の南30kmほどにある清岩鎮は，咸豊11(1861)年に勃発した「清岩教案」で知られているが，同時に明清時代の建築が多数残っていることで有名らしい。社会科学院歴史研究所で貴州出身の何応欽を研究する熊先生の案内で訪れた。鎮の始まりは洪武年間といわれていて，清代には貴州城南部の交通の要衝を占める城塞であると同時に交易所として繁栄した。訪れた当日も農業市が開かれていて，古建築の並ぶ街区に至る狭い通路は歩くのがやっとの大雑踏であった。

清岩鎮の地名が示すように付近から青みがかった石材を産出するので，面積3k㎡余りの鎮の周囲は石積みの城壁で囲まれ，曲がりくねった鎮内の道や階段もほとんどが石葺きである。城壁には修復された南門（定広門）をはじめとして東西南北の4門が設けられ，門の内側には4柱3間の石造りの牌楼が建っている。城内には9寺，8廟，5閣，2祠，1院，1宮という多数の寺廟などがあるほか，青瓦を葺いた木造の商店が建ち並ぶ通りは，東北では見あたらない習俗，面影が認められる。清末に状元となった趙以炯の〈故居〉は小さな博物館となっていて清岩鎮の歴史を展示している。この博物館にも短時間歩き回った場所にも石碑，碑文の類を見つけることはできなかった。

3．安龍

〈貴陽から安龍へ〉

当初の予定を変更して永暦帝の遺跡が残っているという安龍を経由して昆明へ向かうことにした。貴陽を出発，途中で安順に立ち寄り，躍動的な龍の彫刻のある柱で名高い〈安順文廟〉を見学する。花江を過ぎると標高1400mまで登った後に800m余りを急降下，撮影禁止の花江橋で北盤花河を渡り，再び700m余りを登り返す。北盤花河はやがて紅水河，西江と名前を変えて広東省から南シナ海に流れ出るが，盤花河より西側を流れる河川はメコン，サルウィン，イラワジ河に流れこみベトナムやタイ，ミャンマーを経て南の海に流れ出る。盤花河に見られる深く刻まれた渓谷は南部に一般的であるが，これらの河川は，それぞれ別の国家・文化圏を構成する下流の平野部に合流する。東北の河は低い山脈（嶺）の間のなだらかな谷間を流れ，各支流の間や支流から本流へ往来しやすく，流域全体が一つの文化圏に結節している。閉鎖され孤立する流域と，開放的で融合する流域の相違，すなわち南では別の流域と交われない孤立的な流域に居住しているため，多数の孤立した民族を生み出したのかも知れない。このようなことを考えながら夜遅く安龍に到着した。

〈安龍〉

安龍は明代に土司土官の統治した所で元来は安隆と称していたが，順治9(1652)年に孫可望が永暦帝を迎えて安隆を安龍府と改称，それが今の地名の始まりである。孫可望の処遇に堪えかねた永暦帝は孫可望の下を離れて李定国の下に走り順治13年には雲南に逃れた。順治15年になって安龍が清軍の支配下に入ると安籠所と改められ，呉三桂の反乱でも呉軍と清軍の争奪する場所となった。このような歴史のある安龍を，宿泊した双龍酒店の主人の妹である朱おばさんに案内してもらいながら，三輪タクシーで動き回って南明政権永暦帝の史跡を訪ねた。

〈招堤〉

康熙33（1694）年に安龍鎮遊擊の招国遴が治水のために自費を投じて堤を造ったことが名前の由来であるが，堤そのものよりも張之洞の『半山亭記』などここを訪れた文人の碑記が多数あることで有名。この近くに〈永暦王妃墓〉があるというので訪れたが，所在は不明であった。

〈明十八先生墓〉

永暦帝が李定国の下に走ったため，孫可望は順治11(1654)年に永暦帝の侍臣呉貞毓など18人を殺害して街頭にさらした。逃れた永暦帝と李定国はその忠節を悼み弔い，更に清朝も孫可望と李定国の抗争の犠牲者として追悼して墓所を祀った。中華民国になると国民党中央行政院や貴州省政府も祭葬に手を貸し，民国31(1942)年には当時中央軍事委員会委員長の蔣介石が「碧血千秋」

の碑文を寄せている。この他にも多数の国民党幹部が碑文を記していてそれが崖に刻まれていた。清末民国になってからは永暦＝明＝漢に忠節を尽くしたことが評価されたようである。

〈院試建造物と永暦行宮〉

十八先生墓にある文物管理所で，これ以外に永暦帝をめぐる遺跡は何もないといわれたが，朱おばさんは三輪タクシーに乗って小高い丘の上の安龍第一中学校敷地に隣接する院試跡に連れて行ってくれた。四方を山に囲まれた小さな盆地である安龍の町を一望する高台であるこの一帯は，元来，永暦帝の議政所である文華殿や后宮があった場所で，そのため住民はここを「行宮」と呼んでいるという。清代には総兵の役所などが置かれ，後に兵火で焼失，道光年間に院試を行う建物が建てられ，その一部が今も残っている。付近には立派な天主教と基督教の教会があり，永暦帝皇后との天主教信仰の関係を想わせたが，県志によればキリスト教の進出は民国時期であるという。清末の動乱の犠牲となった〈万人墳〉を回り双龍酒店に帰る。

〈安龍城壁〉

安龍の城壁は町を囲む市街地内の城壁ではなく盆地を囲む山稜に造られている。興義へ向かう街道から山道を徒歩でたどり，畑と墓に使われている斜面を登りつめて稜線の一角にたどり着く。安龍盆地から標高で400m余りの山並みには南門跡とそれに続く立派な石垣の城壁が残っている。山並みに囲まれた盆地の城壁は，東北の平野が広がる中に設けられた城壁や山城の拠点を囲む城壁とは相違することを実感する。

4．昆明市内

昆明に到着して雲南社会科学院に連絡するが，歴史研究者は現代史が中心で明清の研究者は既に退職してしまったとのことで昆明をめぐる清朝史跡の現地情報は入手できない。博物館などで情報を得ながら昆明の史跡を訪ねた。

〈雲南省博物館〉

ガイドブックには「地方史の展示が充実している」とあったので期待して赴いたが，現在は雲南地方史部門は展示していない。仏教部門では大理を中心にした漢族とは相違する仏教文化が，青銅器部門では殺人柱をかたどった銅鼓など滇池文化の展示が充実している。館員に聞くと〈金殿〉に呉三桂史料が多いとのことである。

〈金殿〉

昆明市北郊の鳴鳳山にあり，世界花博覧会場はこの近くで開催されている。鳴鳳山中腹には万暦30(1602)年に雲南巡撫陳用賓が武当山を模して大和宮を創建したことに始まる道教寺院群がある。寺院群一番奥の紫禁城と呼ばれる地域に，呉三桂が康熙10(1671)年に寄進した銅製の眞武殿がある（銅製であることから金殿と呼ばれる)。総量250トンの銅を使用したという2階建ての金殿の梁には「大清康熙十年歳次辛亥大呂月十有六日之吉平西親王呉三桂敬築」と大書されている。近くの天師殿文物陳列館には，呉三桂の使用した長さ2m余りある〈三桂大刀〉（大官刀）が展示されている。また〈呉三桂と陳円円〉と題する展示があり，昆明に広く伝えられる呉三桂と陳円円の故事を30幅の絵で説明している。第1幅が陳円円のは蘇州出生で始まり，第30幅が呉三桂の死後，清軍の昆明入城と陳円円の蓮花池入水自殺で終わることが示すように，主人公は呉三桂ではなく陳円円である。

〈蓮花池〉

呉三桂が陳円円のために造営し，陳円円が入水自殺した場所とされているが，特に表示があるわけではなく，表通りからは全く見えない。食堂の建物を通り抜けて池畔に出ると，池の中に陳円円の故事が記さた石塔が建てられていた。また食堂前の駐車場の一角に康熙年間に建てられ，文革の最中に破壊されたという陳円円を描いた石碑（本来2つで一対だったが今は1つたけが探しだされた）が置かれていたが，摩滅していてほとんど読めない。

〈五華山〉

昆明市内で一番高い場所であり，元の時代山頂に五華寺が創建されたのが始まりで，明代には王府が置かれ，明末には李定国に迎えられた永暦帝の宮殿が建てられ，呉三桂もここに宮殿を設け，今は雲南省人民政府が設けられている。歴史の転変と呉三桂の栄華を偲ぶためにも是非訪れたかったが，衛兵に政府弁公室がある場所には無用の者は立ち入れないと断られ，山の下から引き返した。

〈永暦帝殉難處〉

呉三桂の手でミャンマーから連れ戻された永暦帝は五華山の西側の金蝉寺に拘留され，ここで自縊を迫られ殺害されたという。博物館の写真には金蝉寺のあった場所に建てられた「明永暦帝殉難處碑」の写真が展示されていたので，昆明でも古い町並みの残る青雲街で金蝉寺址を頼りに碑のある場所を探したが，この一帯には開発の手が加えられていて，探し当てることができなかった。

〈大華寺〉

昆明の西15kmにある滇池のわきにそびえる標高2500m余りの大華山山中にある元代創建の仏寺。創建を記した元代に造られた石碑が保存されているが，台石はともかく碑文そのものは後からの模刻であろう。明の雲南鎮守国公沐英の後裔が，この寺を自分の家廟とみなして保護していた。さらに康熙27(1688)年には，雲貴総督范承勲が呉三桂の五華山王府を壊し，その材料をここに運んで大華寺重修の材料とした。五華山から移されたものの一つが山門の外側にある石牌楼であるという。昆明市内の五華山から遠く離れた滇池の山中に，このような石材を運ぶためにはけた外れの労力が必要であったと想像されるが,何が目的でそのような作業を行ったのであろうか。

〈雲南民族博物館〉

滇池畔に広がる休暇村の中にあり，広い敷地に立派な展示館が建ち並んでいるが見学者は全くいなかった。雲南地方の少数民族について，「少数民族の社会形態と改革と発展」「民族服飾と織物工芸」「民族の祭日文化と民間楽器」など7つの主題に分けて展示しているが，トーテムや仮面・民間信仰など興味の惹かれる展示が多い。主題の1つに「民族文字古籍」があり，この1室には植物を利用した文字や彝語の新訳聖書・契丹文字の拓本と並んで，鎮雄県南台で採集したと説明のある「恵無疆」満漢合璧の対聯の拓本が展示されていた。明日は北京に戻るという日に，満洲語文化が雲南にも及んでいたことを示している対聯に出会ったことに感慨を覚えた。

北京で会った承志氏にデジタルビデオカメラで撮影したこの対聯の拓本を見てもらい，満洲人の対聯の風習について問うたが，対聯の風習は知らないとのこと。帰国後にあまり写りの良くないデジタルビデオの画像を基に，承志氏に満漢合璧対聯の解説をお願いしたのが，本号掲載の「雲南満文対聯解説」である。

5．大理城と南詔国城址

〈大理城・南詔国城址・巍山古城〉

昆明の滇池を横目に飛び立った飛行機は30分余りで洱湖を見ながら大理空港に着陸する。城壁に囲まれた大理城は観光地と化しているが，城内にある大理城博物館には順治年間鋳造の紅衣砲が置かれていた。或いは呉三桂軍が持参したものだろうか。

大理の南は2300m余りの峠を越えて巍山彝族回族自治県に入ると，「アヘン毒品取り締まり」の標語があちこちに大書され，〈黄金の三角地帯〉に近いアヘン密売地帯を思わせる。紅河の流域にある南詔国の古城を訪れたが，麦畑の中には西壁と北壁の址や宮殿址らしい中央大地が残っていて，この周囲では瓦や陶器を表面採集できる。

古城鎮から車で10分余り走ると，巍山県の中心部でもある巍山鎮に〈巍山古城〉がある。ここ

は洪武年間に開かれた街というが，北門鼓楼（ここに文物管理所がある）と鐘楼が残っていて，この間を結ぶ歩いて10分ほどの中心街路両側の建物は古い様式を残している。近くの図書館には石碑が保存されているというので訪れたが，新しい施設に移転するため撤去してしまったとのことで，石碑を確認することはできなかった。

6．潞西（芒市）

〈大理から潞西へ〉

大理を車で出発し下関から高速道路に入るが，高速道路は10分ほど走った平波付近で終わってしまい，後は高速道路建設中の悪路となる。この道は怒江・サルウィン河沿いにミャンマーまで続く滇緬公路であり往時の援蒋ルートでもあるが，この付近では谷底と峰の間の高度差1000m余りのアップダウンを繰り返す。走っているのはトラックがほとんどで，工事車が落としたのか道の真ん中に大きな石が落ちていてかなり物騒な道であった。永平で濁流の怒江支流を渡り，ここから怒江沿いに保山を目指す。保山は怒江の両岸に広がる平野地帯。最近建ったらしい保山博物館は月・火曜日が休館，ねばったが責任者が不在で鍵が開かず断念する。

保山から龍陵，潞西（芒市）を目指して次第に高度を下げていくが，高度が下がるにしたがいバナナ畑が広がりパパイヤが実を付けている。日中戦争で戦略拠点として日中両軍が奪い合った怒江の渡河点には，怒江大橋（恵通橋）が深い谷底に架けられている。ここでは人民武装警察の検問が行われていて，この地域外の中国人である王禹浪氏のみが50元の入域料を徴収される。谷底から山頂まで再び1000m余りの高度差を登り返すが，途中の段々畑では1月なのにもう小麦が穂を出している。龍陵を通過すると徳宏泰族景保族自治州に入り，怒江流域の平野部となり，アップダウンも無くなり，道も良くなって拠点とする潞西に到着した。

〈潞西からミャンマー国境へ〉

潞西からミャンマーとの国境貿易の街である瑞麗市街を経て，郊外にあるミャンマーとの出入口の弄島へ出向く。ここには国境検査場があり，土地の人は簡単な手続きで河を渡りミャンマーに行くらしい。我々も30分間で往復することを条件にサルウィン河の支流瑞麗河が見える場所まで行くことが許可される。広い河畔の一角には中緬両国の友好記念碑が建ち，ゆったりとしたとした流れを小舟でミャンマーに渡っているが，人も物も移動は閑散としていて，茶店の音楽だけが騒々しい。

瑞麗に引き返す途中で見つけたミャンマー式仏塔寺院に立ち寄るが，ここでは全く漢語は通じずミャンマー語のみ。どうやらこのあたりにある「一塞両国」（一つの村に中国とミャンマー領国が同居している）のミャンマー地域に入ってしまったらしいので慌てて引き返す。

瑞麗市街に戻り国境往来と貿易が行われている口岸に出向くが，不思議なことに国境の河のはずのサルウィン河の左岸も中国領で，河を渡った左岸の陸地に国境がある。ここでも両国の人は簡単な手続きで往来していて，緬甸翡翠などの貿易品を扱う商店が軒を並べている。

〈南甸宣撫司衙門〉

地図で潞西への道をたどっていると，徳宏泰族景保族自治州に「土司衙門」の地名を見つけ，潞西で尋ねてみたが何の情報も得られない。ともあれ行ってみたいのだが潞西から土司衙門のある梁河まで片道120km余りあり，昆明に帰る飛行機は15時発，あとは運転手次第である。運転手の張さんは霧が濃くなければ往復することはできるだろうから行ってみようといってくれる。早朝に出発したが昨日同様の濃霧，幸い梁河への道は次第に高山地帯に入って標高が高くなるにつれて霧が晴れる。曲がりくねった山道はしっかり舗装されていて対向車もないままに飛ばし，2時間30分余りで梁河に到着する。

町の人に土司衙門と聞いてもなかなか解らない。行きつ戻りつして探し当てた〈南甸宣撫司衙門〉は町の真ん中にあった。

入場券を買って入り説明を聞く。正統9(1444)年に始まる南甸宣撫司は各地を転々としてこの地域に衙門を定め，何度か改築されたが現在の建築は咸豊元(1851)年に建て始め，以後80年余りかけて完成したものであり，現在は国家級文物の指定を受けているという。総面積7,760㎡に150間余りの建築群，四合院風の中庭のある正堂の他に戯楼や花園，食料庫や軍需庫，馬屋や監獄まで備えた規模壮大な建築である。

土司制度が開始された明代以来，明清の交代，清の滅亡と辛亥革命，日本軍による芒市占領，日本の敗退と国民党の支配，共産党軍＝解放軍の進出と中華人民共和国による支配という激しい変動にもかかわらず，当初の土司「刀姓」がこの地方の有力者として君臨し生き残り続け，共産党政権の現在も存続していることが，土司制度の特徴を理解する鍵となりそうである。

（東北学院大学文学部）